横塚さんの学問
——最近の仕事から——

高　木　昌　史

その悠然たる風貌の蔭で，横塚さんはどのような学問の道を歩んで来られたのだろうか。多くの謎を残したまま去ろうとしている我らのゲルマニストの正体は，もしかしたら彼が取り組んだ学問から逆照射されるのでは，という期待と予感に駆られて，以下，ペンを執る（正確には，PC のキーを打つ)。もちろん，長いキャリアを誇る彼のことなので，ここにご紹介できるのはそのほんの一部にすぎないが。

横塚さんの専門分野は，管見では，大きく三つに分類される。第一はキリスト教，特にカトリック系のドイツ作家，第二はトーマス・マンを中心とする現代ドイツ文学（国内外の亡命文学を含む)，第三は中世から近世にかけてのドイツ神秘主義である。

まず，カトリック系作家では，E・ランゲッサー（1899–1950）が挙げられる。「〈終末への巡礼〉—エリザベート・ランゲッサー—『消えない印』」は，『成城文藝』に3回にわたって掲載されたもので（第62号，1972年／第68号，1973年／第93号，1980年)，カトリック的世界観と神秘主義に新たな表現を開拓したユダヤ系女流作家ランゲッサーの長篇小説『消えない印』Das unauslöschliche Siegel（1946年）を精密に解読した本格論文である。横塚さんが得意とするカトリック系作家には他に，ラインホルト・シュナイ

ダー（1903–58年）がいる。第三帝国において執筆禁止令を受けながら，ナチスに対する精神的・倫理的抵抗を敢行した作家シュナイダーについての論文で，ドイツで出版された論集に収録された。Aus der Tiefe der dunklen Nacht. Eine Skizze von Reinhold Schneiders Weg der Angst. in; Über Reinhold Schneider. Hrsg. v. Carsten Peter Thiede. Suhrkamp Verlag, 1980, S. 261–280. 邦訳すると，「『暗き夜』の深みから。ラインホルト・シュナイダーの不安の道に関する断片メモ」，『ラインホルト・シュナイダー論集』，カールステン・ペーター・ティーデ編，ズーアカンプ社，1980年所収，261–280頁，となろうか。同社はベンヤミンやアドルノの著作集などを刊行しているドイツ有数の出版社で，収録された横塚さんのドイツ語論文は，そのレヴェルの高さを実証している。

現代のヨーロッパ文学を代表する一人，小説家トーマス・マン（1875–1955年）も横塚さんの得意作家である。マンの『日記』は，専門家にとってはもちろんのこと，一般に二十世紀の歴史的・文化的状況を知るための一級資(史)料で，その邦訳『トーマス・マン日記』の4冊目「1940–1943」（森川俊夫・横塚祥隆訳，紀伊国屋書店，1995年）の1940/41年を分担している。『ヴェネツィアに死す』，『魔の山』等の作品で有名なマンは，1938年，ナチス・ドイツを避けてアメリカ合衆国へ亡命，はじめニュージャージー州プリンストン大学で客員教授を勤め，40年，カリフォルニアへ移り，第二次大戦後の1952年，ヨーロッパに戻ってスイスに定住，55年，チューリヒで亡くなった。横塚さんが翻訳した『日記』はしたがってカリフォルニア時代のもので，前述邦訳二段組で570頁あまりの大部である。同書には，同じく1938年，ドイツからニューヨークに移住し，41年にはカリフォルニアで亡命生活を送っていたユダヤ系思想家アドルノ（1903–69年）とマンとの交友記録も収録

されている。読者には興味が尽きないが，多くの資料を駆使しなければ成し得ない訳業である。

『聖書を彩る女性たち』（小塩節監修，毎日新聞社，2002年）も見逃せない。横塚さんは同書Ⅲ「新約を生きた女性たち」1「エリサベト――この子の名はヨハネ」（289–304頁）を担当した。聖書の中でも最重要人物の一人である洗礼者ヨハネの誕生にまつわる物語は，多くの美術作品にも題材を提供しているが，この章を丹念かつ魅力的に描写し，「あとがき」では，編集委員代表として，同書の成立事情を紹介している。広く一読をお薦めしたい一冊で，ちなみに私の妻も愛読者である。

最近の研究では，「フリードリヒ・シュペーのこと（1）　東洋宣教に憧れたイエズス会士」（『ヨーロッパ文化研究』第21集，2002年）も注目される。ドイツ・バロックの抒情詩人シュペー（1591–1635）は，魔女裁判が荒れ狂った当時，それに反対しつつも，200人もの無実の女性を火刑場に導かざるを得なかったイエズス会士であった。

以上，最近の仕事から幾つかを紹介してきたが，作家の名を見ただけでも，横塚さんの学問の根本的な傾向が浮かび上がってくるのではあるまいか。時代状況の只中における人間の営為，それを見据え苦悩した作家に，横塚さんは強い関心を向け，夜から昼へ，深みから表面へ，影から光へと志向するその在り方に深い共感を寄せているように思われる。彼のそうした姿勢は，今後，確かな記憶として，ヨーロッパ文化学科，通称ヨロ文の後輩たちの脳裏に末永く刻み込まれていくにちがいない。最後に，ふと思い浮かんだラテン語を記したい。De profundis clamavi ad te Domine.「深イ淵ノ底カラ，主ヨ，アナタヲ呼ビマス」。